

・優秀賞

ほめられない“ごほう美”

東北小学校（東北町）

六年 萌^も 出^{だし} 心^{ここ} 亜^あ

私のお父さんはほめません。私が陸上の大会で自己ベストを出しても、習い事で水泳やピアノをやっても「すごい」や「がんばったな」などのほめ言葉は一切しゃべりません。私は、ほめてほしくてやってるわけではないけど、なぜかお父さんは私をほめることはありません。ただ、何かやった後、

「今日の夜ご飯何食べたい？」

と聞いてきます。私が、

「焼肉を食べたい」

と言えば、焼肉を食べさせてくれました。私はお父さんのその質問や行動に何も感じていませんでした。

ある日の大会の後、いつものように

「何食べたい？」

と聞いてきた時、お兄ちゃんがお父さんのその行動の意味を教えてくださいました。お兄ちゃんもほめられることはないけど、何かをがんばった後に私と同じように質問されているそうです。お父さんが聞いてくる「今日何食べたい？」は、お父さんなのほめ言葉なんだよと言っていました。それを聞いた後も何かをがんばると、お父さんは変わらず、

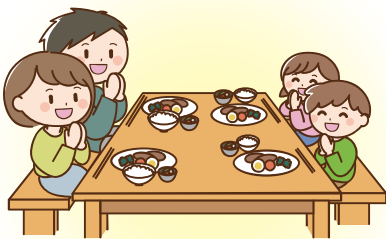
「今日何食べたい？」

と聞いてくれました。お兄ちゃんから理由を聞いていた私は、お父さんは言葉じゃなく行動で示してくれるんだと感じました。お兄ちゃんから聞いた理由を知ってから、私はそのお父さんの質問を“ごほう美飯”とひそかに名づけました。理由を聞いてからの“ごほう美飯”はおいしさが増し、愛情も感じました。

でも、一番感じた事は、特別な“ごほう美飯”を食べさせてもらうことよりも、家族みんなで今日の出来事を話しながらご飯を食べることがとてもうれしいことだと思いました。それは、家で食べるなんでも無い日のご飯でも、家族で食たくを囲んだり、今日の出来事を話し合っって食べることが、何よりも元気の源なのだと思います。

来年中生になると、小学生とはちがってテストや部活で大変だと思うけど“ごほう美飯”を目的にするのではなく、私は、自分のしょう来のためにこれからも、どんなことにでも取り組んでいこうと思います。そして、大人になったら今度は私がお父さんに今まではがんばってくれている“ごほう美飯”を食べさせてあげたいです。最後に、その日がいつきてもいいように、練習しておこうと思います。

「お父さん今日何食べたい？」



・優秀賞

ばばのいなりずし

合浦小学校（青森市）

六年小 鹿美遥

「今日はばばのいなりずしだ。」

私のばばは、運動会や学習発表会などの行事やお祝いがあるときにいなりずしを作ってもってきてくれます。私は小さいころからばばのいなりずしを食べているので、

「このいなりずしはだれにも作る事ができないばばの味なんだ。」

と思っています。

私たち家族は、このお祝いの日を心待ちにしています。

「来週、いなりずしを持っていくね。」

というれんらくがくると、私たちは、

「やったあ。」

と言います。祖母はつるたに住んでいるので、ひさしぶりに会えるし、いなりずしもいっしょに来るから、うれしくてたまりません。

ばばのいなりずしはとてもシンプルです。あぶらあげの中に入っているのはすめししかありません。ごはんはもち米なので、もちもちしています。あぶらあげは、ばばのひみつの味で味付けされています。この前、売っているいなりずしを買って食べました。

一口食べて、

「うん。」

と首をかしげました。

「なんでだろう。やっぱりばばのいなりずしとはちがう。」

と私は言いました。みんなも

「そうだね。やっぱりばばの味とはちがうよね。」

と言いました。私は小さいころから食べているので、食べ慣れているということもあるとは思いますが、みんなが口をそろえて

「ばばのいなりずしは最高だね。」

と言います。

いよいよ、久しぶりにばばのいなりずしがとうちやくしました。私たちはみんなばばたちが来るのと同じくらいにこのいなりずしを待ちわびていました。

「いただきます。」

みんなではばばのいなりずしを食べました。自然と家族みんなが笑顔になります。

「おいしいね。」

とみんなが言いました。

「この味をずっと食べたいから、明日に残しておきたいな。」

と言うと、ばばは

「ばばのいなりずしは次の日になるとおいしさは半分になるよ。」

と言いました。だから、その日のうちに食べきるようになっています。

私は夏休みにばばのところに行って、ばばの味を受けつぎたいと思っています。ばばにおいしさの秘密を聞いて、その愛情も受けついでいきます。来年はばばの味プラス私の愛情を入れたいなりずしを作ることを楽しみにしています。

・優秀賞

家族が笑顔になるお米たき

三条小学校（八戸市）

四年 戸嶋望結

「望結のたいたご飯、一番おいしい！」

父と母の喜ぶ声と、おどろく顔を見て、ごはんたきのお手伝いをしてきてよかったなと心から思っています。

私は三年生の冬ごろからお家でお留守番することが増え、

「帰ってきたらお米たいておいて。」

と母に言われるようになりました。

「わかった。」

と返事をするものの、心の中では「めんどくさいな。」と、最初はいいややお手伝い始めました。冬だったので、冷たい水がいやで、ゴム手ぶくろを付けてやっていました。そしたら母に、

「おいしくたいたために、冷たくてもがまんして素手でやさしくこすってあらってね。とげたら、ざるにあげて水切りするんだよ。」

と言われ、ただあらって水を入れて、すい飯器のボタンを入れればいいと思っていた私は、「ご飯たきは、冷たいし意外とめんどくさいし、やりたくないな。」と思ってしまいました。

ところが、埼玉の祖父が遊びに来たときに、ご飯たきをしてくれたので、私は「ラッキー。」と思いながらその様子を見ていま

した。するとすい飯器にお米と水の入ったかまをセットした後に、水を四個入れてからスイッチを入れたのです。私はびっくりして

「なんで水を入れるの？」

と聞くと、

「おいしくたくうらわぎ！」

と得意気に話す祖父。私は、「本当においしくなるのかな。」と信じられませんでした。母が帰ってきて、待ちに待った夕飯の時間になりました。ご飯を一口食べると、いつもよりあまくておいしく感じました。母も

「今日のご飯おいしいね。望結がたいたの？」

「ううんじいちゃん。」

なんだかくやしくなり、「じいちゃんよりもおいしいご飯をたくぞ！」と思った私は、さっそく祖父のうらわぎをまねしてみることにしました。「おいしくなあれ。」と、やさしくお米をといで水を切り、水を入れて、最後に氷を四個。水の量にも気をつけてたくうちに、おいしさが日によってちがいがい、なんだか楽しくなってきました。そして、今別の祖父母が遊びに来た時に

「このご飯おいしいね。」

と言ってくれたのです。

「望結がたいたんだよ。」

と思わず大きな声で言っていました。

「望結のたいたご飯、一番おいしい。」

父と母の言葉を聞き、びっくりした顔を見てこれからも、もっともっとおいしくご飯をたいたり、おかずを作ったりして、私のうでで、家族が笑顔になる食事タイムにしていきたいと思いました。ご飯たきが、私を少し成長させてくれたような気がします。

・優秀賞

六人のご飯

合浦小学校（青森市）

四年 八木橋 冬真

「最高だな。」

ぼくは、すきやきやサイコロステーキといっしょに食べるごはんが大好きです。このごはんを食べられるときは一年に一回。それは田うえの日です。そして、このごはんはおじいちゃん、田んぼでしゅうかくした米なので、特別おいしいのです。

ぼくには、十和田におじいちゃんとおばあちゃんがあります。ぼくのおじいちゃんとおばあちゃんは田うえやいねかりなど田んぼでさぎょうをします。お父さんとお母さんは、いっしょに田うえをしています。ぼくや妹はまだ小さいので、田うえの手つだいをしています。それは、米せんようのはこにたねを入れて、土をかぶせていくというさぎょうをくりかえします。

「はあ、つかれたなあ。早く休けいにならないかな。」

ぼくと妹は休けいタイムが楽しみです。なぜなら、この田んぼでしゅうかくした米をたいて、みんなで食べるからです。

「お母さん、休けいまだ。」

とぼくが聞くと

「まだあと三十分くらい。」

と、お母さんが返します。ぼくと妹は、みどりいろのなえを見て

「早く休けいがいいな。」
と言いました。

ようやく、まちにまった休けいの時間が来ました。サイコロステーキといっしょに出てきたのは、この田でしゅうかくしたごはんです。ぼくは目の前にあるみどりのなえを見て

「このみどりのなえが、白くてこんなにおいしいごはんに変わるなんてふしぎだな。」

と言いました。すると、お母さんはこのように言いました。

「ごはんは一人で食べてもおいしくないけれど、おじいちゃん、おばあちゃんと自分たち家族、合わせて六人で食べるとおいしいよ。」

「たしかに、六人で食べるごはんはおいしいね。」

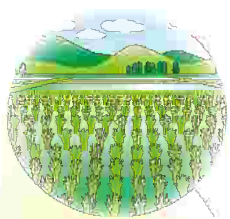
と、ぼくは言いました。一年に一度しか食べられない特別なごはんということも理由の一つだと思います。ぼくは、

「このみどりのなえが米つぶになるんだもんな。」

と言いつつ、ごはんを食べました。

今年植えたなえは、秋にいねかりをします。ぼくや妹はまだいねかりの手つだいはできません。でも、もし少し大きくなったらいねかりの手つだいをしたいです。そうすると、今よりもっとおいしいごはんになるかもしれません。その時は、ぼくは、こう言います。

「六人でさぎょうして作ったごはんは、やっぱり最高においしいね。」



・優秀賞

家庭科で作ったおにぎり

合浦小学校（青森市）

六年 花^{はな}田^だ風^{なぎ}沙^さ

「おにぎりを作って、みんなのおうちの人にあげましょう。」

家庭科の時間に教頭先生が言いました。いつもはお母さんが私に作ってくれるおにぎりですが、今回は私がお母さんに作るのととても楽しみでした。具も自分たちで考えました。うめぼしを持ってくる人や、塩だけのおにぎりにする人もいました。私は、お母さんが好きな塩こんぶを入れることにしました。

いつもは炊飯器でご飯をたきますが、今回は水がどのようにひいていくのを見るために、ガラスの器に米を入れて、ガスでたきました。米をたいているとき、たき具合が直接見られるので、少し心配になりました。水があわのようにぶくぶくとなって、のりみたいになっていたので、

「おいしくできるかな。」

と友達のお友さんが言いました。私は、

「おいしくできるよ。」

とはげますように言いました。

いよいよふたを開けるときがきました。湯気がばあっと私たちにかかりました。教頭先生が、

「上手にたけているね。」

と言いました。私はとても自信をもちました。ご飯を見ると、つぶが立っていて、ご飯はつぶれていませんでした。かきまぜるとおこげが出てきました。おこげを食べたことがない人も班にいました。

「おこげはきらいだな。」

「食べたことがないから食べてみたい。」

という声があがりました。私は班のみんなでそういう話をしていることが、なぜかうれしい感じがしました。

みんなでごはんをにぎる時がきました。茶わんに入れたご飯をサラララップでにぎろうとした時です。

「あつい、あつい、めちゃくちゃあついんだけど。」

と光莉さんが言いました。駿太さんが

「がんばれ。」

と応援していて、とても盛り上がりました。ガスでたいたできたのごはんはやっぱり熱いんだと思いました。

私はおにぎりを二つ作りました。お母さんのおにぎりには塩こんぶを入れました。私のおにぎりの中に具は入れませんでした。だからご飯の味がよくわかりました。ご飯はほくほくしていて、

「ご飯ってこんなにおいしいんだ。」

と言いながら食べました。のりがあまっていたので、巻いて食べました。ご飯だけでもおいしいし、のりといっしょでもおいしいし、自分で作ったおにぎりは最高でした。

「このおいしいおにぎりを早くお母さんに食べさせたいな。」

私は片付けをしながらつぶやきました。